美術の窓(38)

「松浦屏風」の鑑賞 ―大画面の人間群像の芸術―

大和文華館館長 吉川逸治

昨秋の宗達芸術の形成を求めるテーマで開催いたしました特別展に際して、いくつかの感想を述べました。特に前回は宗達の扇面絵など小画面の絵画で彼がいかに丁寧に色調の明暗調を整頓し、ぼかしを導入して、色彩遠近描法によって対象の立体感から空気の漂う空間構成を実現しているかを観察しました。しかし、彼は襖絵、屏風絵の大画面になると、この様な微細な色調構成による三次元空間の絵画は追及せず、背面を閉ざした二次元の絵画制作を実行します。養源院の襖絵、板絵がこの様な制作の始まりとなって、数々の大画面の名作を描くことになりますが、宗達は旺盛な時代の人間生活を直接に取り扱わず、文化伝統のうちに洗練され、浄化された過去の物語絵巻の人間描写を借りて、彼の芸術の人間像を作り出します。

当時の人々の生活環境のなかから好んで取り上げられた画題として祭礼、遊楽、職人もの、南蛮ものなど数え挙げられますが、この婦女遊楽図のなかで、本館の「松浦屏風」が独特な存在を誇っていることは皆様もよくごぞんじのことでありましょう。

この屏風は、昭和27年京都の美術商から購入したもので、もと九州の大名松浦家の旧蔵であったところから、松浦屏風とよばれておりますが、制作は京の無名の町絵師と推定され、華やかな衣装をつけたほぼ等身大の婦女子が多数（18名）描かれた珍しい六曲一双の屏風で、制作年代は慶長期とされて、国宝に指定されたのでした。その後、この屏風に描かれた衣装について服飾史の専門家である山辺知行先生に調査研究を依頼しましたが、山辺先生の意向では慶長期以降とされたご様子です。その後に服飾模様関係の観点から調査された専門家、特に大手前女子大学の切畑先生はこの屏風の制作を寛永年間、あるいはそれよりも降つた時期を提案されるご意見を発表されております。

無名の町絵師の制作と考えられますから、高尚な芸術を目指して麗筆をふるった大家の作品とはちがって、拙さを含み、一種の低俗ささえ隠しきれず露われます。婦女子の顔や手の描きかた、衣服を着たその姿勢、身振り、動作などある型どおりで、身体比例の自然らしさに欠け、特に優美なものともいえません。また当時流行の派手な意匠の模様をつけた衣服を写すのも、専門家のご指摘にあるようにかならずしも的確、忠実とはいえないようです。流行衣装を利用して、自分の制作を引き立てているのです。

絵画としては、当時主流となった大画面制作の諸派が心掛ける空気遠近関係の構成や物の立体描写をするための濃淡の墨やぼかし、陰影などなく、平塗りされた色彩本位の平面的な形像の絵画です。顔の描法はほとんど同じで、表情を抑え、僅かの変化で意思表示を感じさせます。上半身が小さく、丈高い身体も、背をまるくし、自然態を離れた立姿、座姿の定まった二つ三つの型があって、繰り返し用いられ、身振りも仕草も抑制され、緩慢で、これも暗示的です。背後の金地は一つの線も記入しないのに、立姿の女子の背後には壁や襖の垂直面を感じさせ、彼女らの裾や座姿の傍では座敷の平面を感じさせます。婦女子たちの存在は自ずから空間をそこに設定してゆきます。そして、同じタイプの型の繰り返しは、そこにリズムを生じさせます。

左側左端の座姿の二人は離れてカルタに興じ、右側右端の衣と双六盤を組み合わせて沈黙のうちに場面のざざめきを閉じます。構図は、立姿、座姿の二人ずつの対話する一対の婦女子を単位として任意にはじまります。組み合わせて右から三人の群、左は四人の群と転調させ、真面目に、あるいは楽しく語らせます。遊楽のやかたの昼下がりのひと時を示す風俗画ともいえましょう。木戸番の女子が女将に文を渡し、うしろで立姿の美女が晴れ晴れした顔つきで両手にひろげた手紙をよみます。傍で地味なしぼりの着物の女性が少し暗い表情で、彼女の方を見、その足許では、もう一人の女性が静かに三味線を爪弾きする音がきこえる様です。その後ろに立つ二人の美女たちは足許の少女が端の黄衣の姉君に捧げ出すギヤマンの鉢について囁きあい、この黄衣の美女は、右手を少女の頭にのせ、夢見るような表情で右手をふところにおさめて、何かつぶやいています。彼女の衣装の立波に跳ねる兎の模様がその心のうちを物語るのでしょうか。彼女はこれまでの三人ひと組の群構成のなかに入りこんで、ためらう様子です。

左の屏風は右端で青地に鳳凰など華麗な模様を飾る衣装をきた美女が左手に短い煙管をもち、たったままで神経質に右手で、足許の少女が下から差し出す長い煙管をうけとる。少女も目出度い蝶の模様をつけた衣服をきている。彼女のうしろには真顔になって青衣類の美女に話しかける橋模様の衣を羽織った美女がいます。彼女らの左うしろに、一段と大きくかまえて、煙管の美女を眺める派手な衣装の晴れ晴れした姿とその足許に坐って、立て膝で筆をとって手紙を書く賢そうに口もとを結ぶ座姿の美女、この一双の屏風の場面全体で一番賑やかなところで、左端に立つ赤い絞りの地味な着物の女性が手鏡をもってお歯黒をつけながら微笑している姿が六人一組のまとめとなっています。

これは右の屏風で、消された十字架を頸からさげていた黒の絞りの着物の女性が左端の黄衣の美女と対照しているのに相応します。また、二つの屏風にまたがってさきの赤い絞りの女性と対称し、この大きな場面の主要な部分を締めくくります。

「婦女遊楽図」を通して作動しているモティーフは恋文あるいは恋心でありましょう。それゆえ、木戸番の女性が差し出す文から右上に昇る斜線が構図の主導線となり、人々の群のなかを二つ三つ繰り返して、ひとつ下降線を作り、画面を収め、左側に移ってまたそれを繰り返し、左右の屏風画を通し恋愛の競いをいささか諧謔を混えながら静かに語らせます。

そして、この絵が特に著しいのは、大きな女性人物像各々が恋愛の思いを荷って造型化されている点であります。仏教や神道など宗教関係ではない美術作品で、近世の西洋画に見出だすような文化史的な理念や、あるいは文芸的な情念を荷った積極的な人間像の群が構成する大絵画に匹敵するものを、この明色の壮んな衣装をつけ、現実を昇華し、多少とも理想化をうけた女性像の群像構成の大画面「婦女遊楽図屏風」に見出そうというのです。

季刊 美のたより №94
平成3年2月21日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.